

部落の構造と慣行についての一考察

— 福島県南部地区B町、A部落の事例 —

金 沢 光 久

戦後の農村は変わったという。

昭和二十年以降の我が国は新しい民主主義体制へと変化し、それに伴い、農村も農地改革などの実施により地主小作制が廃止され、すべての農民は、新しい体制のもとに農業を展開することになった。

しかし、単に我が国が敗戦という事態から得た、民主主義という外からの刺激に対して、農村は果たして、どれだけその姿を変えたのだろうか。農民は彼らの持つすべての考え方、意識といった精神的な面まで、新体制の洗礼を受けてしまったのだろうか。

そして、彼らの部落を支えてきた構造と伝統的な慣行は、現在ではどのように受け継がれ、実行されているのだろうか。

私は、この農民と最も密接な関連にある部落の構造と慣行を、福島県の南部地区、B町内の一小農村（戸数一五五戸、人口六九二人）A部落に求め、私なりの考察を試みることにした。

A部落は典型的な農村で、米作と各種野菜の栽培を中心とする農業が営まれており、最近では都市化の影響か、かなり第二種兼業農家の増加が目立っている。

また、この部落では、ほとんどの農家は私有林を所有し、林業を

表① A部落の職業

職 業	戸 数
農 業	30
農 業 と 公 務	45
農 業 と 商 務	9
農 業 と 建 築	3
農 業 と 務 員	22
農 業 と 務 員	14
農 業 と 務 員	21
農 業 と 務 員	1
農 業 と 務 員	6
農 業 と 務 員	1
農 業 と 務 員	3
合 計	155

表② A部落の用途別面積

用 途	面 積 (㎡)
田	62 6,12 1.3
畑	27 1,104.1
宅 地	7 6,068.3
山 林	2,397,670.6
原 野	3 6,215.3
池 沼	75.9
保 安	358,146
公 用	165
そ の 他	132
合 計	3,765,698.5

兼ねている場合が多い。

こうした状況のA部落において、私はその考察の重点を、表面的なもの（自治組織、選挙、組の組織）と内面的なもの（同族関係、入会地慣行）の二つにおくこととした。

まず、私が最初に着眼したのは、部落民と密接な関係があり、最も表面化しやすい自治組織と選挙についてであった。

周知のとおり、農村における自治組織には、村会、区会、組の組織などがあげられるが、その中で、それらの組織を代表する村長、区長といった人々の性格を把握することになった。

A部落の場合、区長の選出は、投票などの厳密な意味での選挙によるのではなく、部落の寄合で適当な人物が推薦され、部落民が合意をするという「互選」という方法をとっており、選出された区長の役割には、部落民と町役場を結びつける媒介項としての役割と部落の代表者としての役割の二つが認められる。

しかし、ここで問題にしたいのは、そうしたことも、区長という役職が部落のどのような人々によって歴任されてきたかにある。

それは表③よりもわかるように、戦前と戦後では、区長職に就く者には明らかな相違が認められる。

戦前においては、地主、自作農といった階層の出身者によって独占されているが、戦後は、その初期においては、戦前のそれとはあまり変化が認められないにもかかわらず、昭和三十年代に入ると、それまで見られなかった旧小作農、公務員、商店経営者、あるいは戦事中の疎開者などが目につくようになってきたのである。

これは、単に戦前から戦後への体制の変化が、農村にもたらした影響によるものであるととらえればそれまで

表③ 区長の戦前、戦後の変遷

年代	明治25	30	31	32	33	34	明治35	大正12	13	昭和2	3	4	5	これより一期二年制	67	89	10/11	12/13	14/15	16/17	18/19	大平洋戦争終る	20/21
区長氏名	吉成	金沢	金沢	鈴木	金沢	吉成	江田	吉成	金沢	菊池	金沢	吉成	金沢	江田	金沢	吉成	金沢	江田	金沢	江田	金沢	金沢	金沢
家柄	A	A	B	A	C	B	A	C	D	A	E	D	F	E	G	B	H	C	I	J			
地	自作	自作	自作	自作	自作	自作	自作	自作	自作	自作	自作	自作	自作	自作	自作	自作	自作	自作	自作	自作	自作	自作	自作
主	主	主	主	主	主	主	主	主	主	主	主	主	主	主	主	主	主	主	主	主	主	主	主

年代	昭和22/23	24/25	26/27	28/29	30/31	32/33	34	34	35	36	37	38	39	40	41	42	43	44	45	46	47	48
区長氏名	金沢	菊池	金沢	金沢	吉成	金沢	吉成	吉成	鴨志田	金沢	吉成	村上	村上	村上	吉成	近藤	金沢	金沢	金沢	亀山	吉成	金沢
家柄	K	B	L	M	F	N	G	A	O	G	A	A	A	A	H	A	P	P	P	A	I	Q
旧	理	旧	旧	旧	旧	旧	旧	旧	旧	旧	公務員	大阪より	旧	旧	旧	旧	旧	旧	旧	旧	旧	旧
自	髪	小	自	地	小	地	地	自	自	自	自	自	自	自	自	自	自	自	自	自	自	自
業	作	作	作	作	作	作	主	主	主	主	主	主	主	主	主	主	主	主	主	主	主	主

であるが、私はそうした外からの刺激によって、農民の持つ意識、価値観といったものの一部が変化したために生じた現象であると考えたい。

つまり、戦前には彼らの個人評価の基準というものは、「家柄」（地主・旧家）、「土地所有の大小」、「財産」などに置かれていたのが、戦後、それが、「所得」、「人間性」、「能力」へと変化したと考えられるからである。

また、もう一つには、区長という役職の性格の変化、つまり、戦前には区長職が部落を代表する重要な役務と考えられていたのが、戦後、「区長＝部落の小使い」という考え方のもとに関心が薄れ、魅力のないものとなってしまったために生じた現象とも考えられ、それは戦後、一人で何期もの間区長職にある者の例を見れば理解できるものと思う。

このように区長の選出という事象を通してみた場合、部落民の意識、価値観というものは、戦前から戦後への社会体制の変化とともに次第に民主的な色彩を増しており、その意味では、農村は変わったと言えるかも知れない。

しかし、その変化にしても、昭和二十年を期して即座に変わってしまったわけではない。

彼らの根本的な部分での考え方は、未だに前近代的、保守的な思想によって覆われ、実行されていると考えられ、それはA部落における町会議員選挙においても理解することができる。

A部落においては、町会議員選挙は町村合併の関係上、その歴史は比較的新しいが、その選挙時の部落はまるで「祭」と同じである。

つまり、部落民は彼らの利益を最も直接的に反映してくれる代表者を選出するために、一団となって当選への工作を進めることになる。

それは当選に必要な最低得票数の割り出しに始まり、立候補者の選別、運動員の戸別訪問、立候補者から有権

者への「ふるまい」、そして班ごとの「票分け」に終わるが、ここで特に注意したいのは、部落民は彼らと主義主張が異なる者に対しては、支持はおろか立候補もさせないという事実である。

これは彼らの排他性を示すものであると同時に、彼らの保守性を示すものとも言える。

そして、彼らが何故にこのような違反行為までして議員の選出に奔走するかという、最も根本的な疑問について考えるとき、その答は、部落民が無意識のうちに実行してきた「永続的土着性」の思想に求められるのではないかと思う。

「土地なくして百姓できぬ」という言葉も示すように、彼らにとって土地を所有することは必要不可欠な条件であり、その土地を、すなわち彼らの「永久の生活地」となる部落を最も大切に守ってくれる代表者を、最も信頼のおける「縦のつながり」として求めることになるのである。

このようにして考察して行くと、A部落の保守性、ひいては農村の保守性というものが次第に明らかにされてくるが、さらに私は、A部落で年に一回、部落全体によって行なわれる労働作業「夫役」にもそれを見出すことができた。

「夫役」は部落の組の組織である「隣保班」一六班をいくつかのブロックに分けて、各家から必ず一人を強制的に参加させて行なうものだが、これは「沢掘鍵役」と呼ばれている。

夫役の出欠に関しては、その家に病人がいるような場合には夫役は免除されるが、それ以外の理由で出席できない場合には「未進」という一種の代替金を支払うことになり、徴収された未進は夫役の後の宴会のたしにされるといふ。こうした約束の上に成り立っている「夫役」であるが、これは現在のA部落にとっては、ある意味では非常に不合理な側面を有するものである。それは夫役の内容が、あまりにも農業に有利であるために、農業以外の職業を持つ者にとっては部落の単なるつきあいではなく、さらに問題になるのは、その夫役の行なわれる日・時が意外に日曜を除いたウィークデーに多いということである。

これは夫役が、常に農業従事者の生活を基準として行なわれるために生じたわずかな弊害かも知れないが、部落に住む給料生活者などにとっては大きな負担であり、婦人、子供そして老人が夫役に参加しなければならぬ原因を作ってしまったのである。

このようにほんのわずかではあるが、こうした不合理な考え方は、現在の農村の真の姿をとらえることなく、部落社会をいつまでも不合理な、そして保守的な人間の集団としてしまっているものと考えられる。

さて、今度はA部落の少し内面に立ち入って、その同族関係について述べてみよう。

同族関係とはいうまでもなく、本家―分家―孫分家という関係を持つ親族関係に他ならないが、A部落においてはそれを「マケ」と称し、過去においては、部落内の姓名の点から判断して、五つのマケが存在したと考えられるが、現在のこれらの同族関係は、総本家―本家―分家といった典型的な同族関係ではなく、本家―分家の一般的な関係が、それも各マケにわずかに残存しているに過ぎない。そして、この同族関係には、本家と分家との間に主従関係とは別に、地主小作関係が累積することもなく、本家から家産の分与を受けて独立した分家も新しい地主となる場合が多く、両者間の関係は庇護と奉仕という領域を出ることはなかったようである。

私がこの同族関係から得ることのできた一応の結論は、同族関係が次第に弱体化の傾向にある今日においても、なおその親族支配の力、あるいは部落支配の力は、部落民の意識と行動に大きな影響を与えているということであった。そして、その結論を導き出すきっかけとなったのは、A部落の甲同族と姻戚関係を持つ某家のS氏が、県議会議員選挙に当選するまでの同族団の行動にあった。

つまり、本家と分家とが一体となり、部落を中心として選挙運動を展開することにより、S氏は当選を容易に決定することができたのである。こうした同族の力は、部落社会の上に大きく位置づけられ、部落民の意識を形成する上に常に影響を与えずにはおかぬのである。

そして、こうした特定階層による部落支配の傾向は、部落民が利害を共同しあり、「入会地」である「共有林

野」にもあらわれている。

共有林野は、そこから得ることのできる収益を、持株によって組合員に分配するものだが、ここにも地主、旧家、同族の本家株といった階層の支配が、株の集中という形をとってあらわれていた。彼らは、林野の手入れなど参加できない組合員や、生活困窮者からその財力にものをいわせ、株を買い占めたわけだが、最近、それは彼らの名目上の良心からか、一般の部落民に譲渡されることになった。しかし、この現象は彼ら「大株主」の単なる民主的行為ではなく、彼らの所有する林野の手入れが大変だからという、利己心に基づくものであることに注意しなければならないだろう。

以上、A部落の構造と慣行についての考察を簡単に述べてみたが、部落社会というものが、いかに複雑で深遠な人間集団であるか、そして、その中にうごめく農民の姿が、わずかではあるが理解できるものと思う。